

---

# 手のひらの三日月

紺とすん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

手のひらの三日月

### 【Nコード】

N2339BA

### 【作者名】

紺とすん

### 【あらすじ】

針のムシロだった会社は結局クビ、人間関係も気がつけば干上がっていた。そんな冬のある日、たどりついた店で、男が両手を差し出してみせた・・・やや暗めでうじうじしますが一応ハッピーエンドの前中後編です。

## 前編

今になつて思えば、仕事なんかより大切なものはたくさんあつた。友人とか付き合つていた人とか。

もともとが忙しさを理由に切れてしまふ程度の人間関係だったかも、ということについては正直あまり考えたくない。

どっちにしても、自分が悪い。

要領がいい方ではないという自覚はあつた。体よく管轄外の仕事まで押しつけられているという自覚も。

それでも、もともとリソース不足の職場ではあつたから、残業残業休出の日々を私は受け入れていた。それで自分が必要とされていると思ひ込んでいたんだから、仕方ない。

いくら忙しくても時間を作つて遊べる人を、私は本当に尊敬してしまう。自分がそれをできないから。

ちなみに、仕事の内容はキャリアを標榜できるようなものではない。つたかない。いわゆる替えのきく仕事というやつで、私よりスマートこなせる人は、たくさんいるだろう。

それでも、入社三年目の秋までは、不器用なりに丁寧な、仕事の方はこなせていたと思う。ある日突然、自分の会社の吸収合併を知らされて、まったくアウェイな環境に放り込まれるまでは。

「バカ、ブス、おまえもう辞めろよ」

初顔合わせから二時間あまり。馴染みのないフロアで新しい上司は、私が提出したプリントアウトを指ではじきつつ、そんなことば

を放り投げた。放り投げた先にいたのは、まあ、私なわけだ。

私の何かが、彼をいらだたせたのだろう。あるいは、人員削減各一名のノルマが課せられていたのかもしれない。とにかく、上司がそのたぐいの暴言をむけるのは、私に対してだけだった。私に対してだけ、暴言が執拗に繰り返された。

もともと疲弊気味の私の心に、小学生並みの語彙による暴言はかなりの破壊力を有していた。

一回バカと言われると、私は二倍バカになった。一回ブスと言われると、私は二倍ブスになった。

仕事のミスは逆に増えていき、身の回りのことにはどんどん気を配らなくなっていた。

胸の奥がずっと重く固まっていた。その上司の声が聞こえるだけで、肩がびくつと跳ねるようになった。

それでも、自分から仕事を辞めることは考えなかった。もっと頑張れば少しは事態がいい方に変わるはず、そう思い込んで、一分一秒をのりきることに専念した。叱責を受けると、指をぎゅつと固く握り込んで、暴言が心に入り込まないように耐えていた。

パワハラとして訴えるとか、それだけの前向きさがあれば、最初からこんな状況には陥らなかつたと思う。

あとひと月足らずで今年も終わるといふ、入社三年目の冬。「自己都合」という名目で二週間後の解雇がひっそり決まったとき、私はやはり、ほつとした。これでようやく、解放される・・・

でも、今の仕事から解放されてしまえば。  
私には、何も残っていないのだった。

これといった特技も、気を紛らわすことのできる趣味も。遠慮なくグチをこぼせるような相手さえ。  
私はいつも、気づくのが遅すぎる。

あと二週間か・・・。

どうせ辞めるんだから、仕事の方は適当にお茶を濁してしまえ、などと思えない自分の性格が恨めしい。

新しい人が派遣されてくるらしいが、多少は苦労が減るように、明日からなるべくわかりやすい引き継ぎ書を作ろうなどと思ってる。そんなにいい子になりたいのか、私。

いやそんなつもりはない、はずなのだが、この融通のきかない性格をどうにかしないと、また同じことを繰り返すような気がする。

と、ここまで考えたところで。

またやってしまったことに気がついた。

ストレスのせいなのかどうか、この数カ月、今まで無意識にできていたことができなくなったり、子どもみたいな失敗をしたりで、ただでさえ重い気分がさらにへこむことがよくあった。

たとえば部屋の鍵をかけ忘れるとかいった小さな生活上のことから、仕事に関することまで、それはもういろいろ。

日常生活を普通に送るっていうだけのことが、どれだけ困難の連続だったのか、その事実にとまどき愕然としてしまう。

そして、今の状況はといえば いつのまにか私は、見覚えのない狭い路地を歩いているのだった。つまり、迷子または遭難。

会社から一人暮らしの部屋へ帰るだけのことなのに。

何百回と通った道筋なのに。

うあ、何百回とか思ったら鼻の奥がツンとした。そりゃ、会社に愛着がないわけはなかった。だからといって、迷子になった揚げ句に涙目って、あんまり情けない。

気を取り直して、誰かをつかまえて道を聞けばいいと思った。思ったがしかし、ぼんやりと暗い道に人の気配はない。急に心まで寒々としてくる。

歩きながらケータイを取り出して時刻を見ると、もうすぐ二十三日。位置検索ってどうやってやるんだっけ、と思ったところで、路地の先にどことなく見覚えのある赤い光が見えた。

思わず足早になって温かな赤い光に駆け寄ってみれば、なんのことはない、それは何回か仕事帰りにお世話になったこともあるラーメン屋の看板だった。

頭の中になんとなく地図ができあがって、こんなルートもあったのかと感心する。同時に、空腹を意識した。

その店は年配の夫婦が切り盛りしている小さなラーメン屋で、一人でも比較的人気やすい雰囲気があったのだが。

二週間後に無職になる自分が引き寄せられたのは、流行っているとはいえないラーメン屋か　はあ。

でも、久しぶりに寄っていきうか。あつたかいものが食べたいし。そう思っけて引き戸を開けると、湿った温かい空気に迎えられ、スーのいい匂いが鼻先をかすめる。

知らず肩に入っていた力が抜けていった。

「いらっしやい」

あれっ、と思ったのは、「いらっしやい」の声がいつもと違ったからで、さらにはその声の主、厨房に立っていたのが若い男だったからだ。いつもの店主夫婦も、客すらもいない。

「何になさいますか？」

ひどく丁寧な物言いに改めて男の顔を見ると、見覚えがあるような気もする。が、思い出せない。バイトの人だろうか。

男は、スーツの上着とネクタイをとっただけ、のような格好をしていて、偏見かもしれないが、ラーメン屋には見えなかった。シャツの袖をまくって、長身の背をかがめて洗い物をしているところのようだが、その姿が店の風景にそぐわない。

なんというかシャープな印象の人だ。が、かけている黒いセルフレームの眼鏡は、幅の狭いレンズが湯気で少し曇っていて、顔の上半分だけがぼわっとしている感じだった。

「あの、しょうゆラーメン一つください」

カウンター席に腰をおろしながら、いつもと同じものを注文した。

「しょうゆラーメン一つ、といってもちよっと待ってくださいね。すぐにオーナーが戻ってきますから。実はちよっと手伝ってただけで・・・あ、戻って来た」

「ああ、いらっしやい」

裏口から直接厨房に入ってきたのだらう、いつものおじさんの姿が見えて、なんとなくほっとした。

「しょうゆ二つね」

男はおじさんにそう言つて、洗い物を続けているようだった。やがておじさんが「助かったよ」と言う声が聞こえて、男が厨房から出てくると、一つおいて私の隣りの席に座った。

そちらから視線を感じたので、思い切つて顔を向けてみた。曇りのとれた眼鏡の奥の瞳は、やはり私を見ていた。

「はい」

いきなり親しげな調子で彼はそう言つと、手のひらを上に向けて両手を差し出した。

反射的に、私も同じ動作をしてしまう。

「うん、やっぱり。エデュコムの第二営業部」

私の手のひらをちらりと確認すると、彼は私が辞める予定の会社名と、合併後の所属部署を言い当てた。

ああ、こんな識別のされ方は嫌だ。

どうして知ってるんだろうという疑問が浮かぶより前に、そう思った。



## 中編

三日月の形をした小さな爪跡が三つ。私の左手のひらに浮かんでる。

今はこういう状態だが、手のひらの下半分が赤黒く腫れていることもある。それよりはまだましだけど・・・暗い路地を通るとき、あるいはそれ以前から、無意識にやってしまったんだろう。

気持ちに負荷がかかったときや不安になったとき、爪を立てるようにして左手を固く握りこんでしまう癖が私にはある。

子どもの頃に注意されてずっと治まっていたのだが、入社後にぶり返し、会社の合併後に定着してしまった。

こんな子どもじみた癖はあんまり認めたくない。せめて跡が残らないようにと、爪も短めに切っているが、こういうわけか、腕の方までむくんでしまうこともある。

会社でこの癖を指摘されるようなことは、今までなかったのに。

「ごめん。無神経なことやっちゃったみたいだね」

先ほどの親しげな調子は引っ込んで、謝る彼の声音は抑制的なものだった。こちらの方が地なのだろうか？

とにかく本気で謝ってくれていることは分かったので、私は首を横に振った。

「別に、謝ってもらうことじゃないですから。でも、どうして？」

「いや、こういう所が欠けているんだ、俺は。怒っていいから。というか、怒ろうよ」

そんなこと言われても困るだろう、普通は。

「俺はね、先月まで第一営業部にいたんだよ。それで、何度か廊下なんかで見かけたことがある。その、手のひらが痛いんじゃないかって気になって、最初はどっちかっていうと顔とかより拳の方を見てただけど」

会社の私の席があるフロアには、私の所属する第二営業部と設計部などが入っていた。第一営業部は、一つ上のフロアにある。ちなみに合併前の私の部署は、さらに二つ下のフロアにあった。

第二営業部が個人事業主など小口の顧客を対象としているのに対し、第一営業部は、大口の法人や、アジアを中心とした海外顧客を担当している。企画にも携わる、いわゆる花形部署だ。営業事務などをこなす内勤スタッフも、私がほぼ一手に引き受けている第二営業部と違って、充実しているはずだ。

さっきの話だと、例の上司に叱責された後に、席に戻れず廊下に出たところかなんかを見られたのだろう。

「実は、この店でも見かけたことがあるよ。思いつめたような顔をして座ってたけど、ラーメン食べ始めたら幸せそうな顔になったから、ほっとした」

うつ、それは痛い。そんな風に見えていたのかと思うと、顔に血がのぼる。

なんだかみじめになってきて、目の前の彼に八つ当たりしてしまいたい。が、実際に怒った顔を向けたりできないのが私だ。

それに、彼の声は穏やかで、馬鹿にされているような感じはまっ

たくない。この調子で営業をかけられたら、あっさりいろいろ買ってしまうかもしれない。

顔を赤くしたままの私を見てまた罪悪感が呼び戻されたのか、彼は少し動揺しているように見えた。その動揺が私に伝染して、何か言わなくてはと焦ってしまう。

「あの、今は一営じゃないんですか？」

「ああ、うん。今は経理部。フロアどころか、入ってるビルも別だね」

一営は第一営業部の通称だ。一営から経理への人事異動なんて、普通にあるんだろうか。

もしかして、左遷？

でも、彼の表情に陰りは見えない。

「ちょっとまあ、この性格ゆえにいろいろあってね。でも俺、商品として経理ソフトを扱ったこともあったし、経理は経理でおもしろいよ」

そう言うと、彼は立ち上がって給水機の方に向かった。

その背中を目にしてはじめて、あの人か、と腑に落ちた。

稟議書を上のフロアに届けに行ったときだったか、その場の雰囲気になんとなく異様に感じられたことがあった。

そこにいた人たちが奥の部長席の方を気にしているのがわかると同時に、そちらから声が聞こえた。端然とした声というのがあった。そういう声だった。

背の高い男性社員がこちらに背を向けて立っていて、部長に向かって反論しているようだった。

そのまっすぐな背中もまっすぐな声も、上司に理不尽な暴言をはかれても言い返せない自分には遠いものだった。

心の感度を下げて防御の体勢に入っていたためか、合併後の社内のできことは、おおむねぼんやりした輪郭しかもっていない。そのなかで、あの背中にくっきりと印象に残っている。

「はい、しょうゆラーメンね」

おじさんが私と彼の前にひとつずつ、湯気の立つラーメンを置いた。澄んだスープのあっさり味のラーメン。

「すいませんね、うちの甥っ子がこんなかわいい人をいじめてしま  
つて」

思わず、かわいくなんかありませんと真顔で言いそうになってから、甥っ子という単語に反応する。

「この人、俺の伯父さんなんだ。たまたま寄ったら、伯母さんが腰を痛めて休みだとかであたふたしててさ。少しでも手伝ってたんだ」「だからね、こいつにつけときますから、今日のお代はいいですよ」「うん、そうしようよ。今までもよっぽど話しかけようかと思って  
いたんだけど、今日は寄ってみてよかった。ほら、冷めないうちに」

金色のスープをひとさじ、れんげですくって口にはこんだ。やさしい味が口いっぱいに広がってから、じんわりと身体にしみこむのがわかる。

それは涙の味ではなく、ちゃんと幸せな味がした。

それからおじさんは、疲れたからとのれんを外してきてしまった。私を導いてくれた赤い光も、消してしまったのだろう。

どうせもう客も来ないよと言ってもいたが、私に気を使ってくれたのではないかという気もする。

食べ終わってから、私と彼は、ぽつぽつと話をした。彼はやはり、合併相手の会社から来た人で、私の二年先輩にあたるそうだ。意外にも、住んでいる場所がわりと近いこともわかった。

さすがに上司の暴言のことは言わなかったが、二週間後に退社が決まったことも話してしまった。こんな話を初対面に近い人とするなんて、私にとっては珍しいことだ。

彼はほとんど黙って聞いていたが、退社のことを話したときは、少し驚いた様子で、でも何かを察したようだった。

「じゃあ、これから新しいことばかりで、楽しみだね」  
「楽しみ？」

そんな安っぽい慰めの常套句、とは思わなかった。

彼なら本当にそう思うのだろう。私だって、そういう可能性もないことはないと思える自分に驚く。

話をしているうちに、胸の奥に居座っていたまっ黒な塊が重みを減らしたようだった。ここ最近では考えられなかったほどに。

結局、代金は受け取ってもらえなかった。なのでせめてこれくらいはと、テーブルや流しのまわりを拭いたりするのを手伝う。

彼はこれから備品の修理を手伝うとかで、遅い時間なのに私を送れないと残念がってくれた。私の方は、話ができて、こんなに気分を軽くしてもらっただけで、十分すぎるほどだった。

これくらいの時間には店に顔を出すから、ぜひまた寄ってくれと彼は言う。寂れた店だけど、しょうゆラーメンだけおいしいよね、

とも。

店を出ると、温まっていた気持ちが少ししぼんで、きちんと感謝の気持ちを伝えられなかった自分をもどかしく思った。

退社するまでの二週間、帰宅する頃には毎日のように、あのラーメン屋と彼のことを思い出してはいた。でも、あの店に入って彼に会ったら、いろいろ情けないことを口走ってしまいそんな気がして、結局一度も足を向けることはなかった。

今日は最後の出社日だった。引き継ぎ書も完成し、私物もだいたいの整理し終わり、あとは淡々と通常業務をこなした。

金曜日だったから、暗くなる頃には週末特有の浮き立つような雰囲気フロアに漂っていた。

その雰囲気反して、送別会も寄せ書きも一切なし。事実上のクビだという事実を改めて思わずにられない。

二十一時をまわったところで通常業務を終了し、周りの人に挨拶をしてまわった。例の上司は離席していたが、朝一で挨拶は済ませた。

もちろん、営業先から直帰した人や、すでに飲みに繰り出した人もいたはずだが、気のせいかな、この時間にしては在席者が多い気がした。

一人ひとりに声をかけて挨拶していくと、普段ほとんど話をしたことがなかった人から、思いがけず丁寧になぎらわれることも多かった。

こちらからもっと積極的に話しかけたりしていれば、もう少し居やすい環境をつくれたのかもしれないと思う。

相変わらず、私は気づくのが遅い。

でも今は、気づけて良かったと思うことにしよう。

エレベーターを降り、ビルを出て顔に冷たい風をあびると、さすがに胸がいつぱいになった。たった三年ぼっちには違いはないけど

それから、ふわふわした布の上のような場所を、ずいぶん長いこと歩いたような気がする。

ふと我にかえって辺りを見回せば。

またしても私は、例の暗い路地に入り込んでいたのだった。

どうしようか。

立ち止って逡巡していたところに、後ろから腕を強く引かれて思わず小さく悲鳴をあげた。

振り向くと、笑いかけのような顔をして、彼が立っていた。

まるで私なんかを見つけて嬉しいとでもいうように。

「ひどい人だな、もう」

「ほんと、すいません。でも驚きますよ、普通」

「そうじゃなくて。あれから一度も来てないんじゃない？」

「ええと、今日、来ました」

彼は苦笑してる。

「今、引き返そうとしてるように見えたけど。ま、いいや。なんかこんなふうになる気がしてた。それより今日は最終出社日じゃ・・・」

「ほんとに、ずっと来たいと思ってはいたんです」

「・・・うん、わかった。じゃあ、今日はあの寂れたラーメン屋じゃなくて、どこか別のところで打ち上げでもしようか」

私は少し考えてから言った。

「いえ、できればしょうゆラーメンが食べたいです。一緒に食べてくれませんか？」

少し笑って頷いてくれた。その顔を見て、自分はこんなにこの人に会いたかったのかと知る。

彼は先に立って路地を歩きだす。道の先の赤い光は、彼の体に遮られて見えなくなったけど、かわりにこのまっすぐな背中を追っていけばいい。



## 後編

今日も客は他にいなかった。その上、私たちを見たおじさんがまたのれんを外してしまった。

この店、つぶれてしまいうんじゃないかと本気で心配になる。けっこう切実に、つぶれて欲しくない。

目の前に置かれたラーメンのスープをすくって口にふくむと、ことばがほろりと口をつく。

「こんなにおいしいのに・・・」

彼が声をあげて笑った。店に入った彼は、曇るしなくても困らないからと眼鏡を外していて、少し印象が違って見える。眼鏡が似合うと思っていたので、ちょっと残念だ。

「商売つ気がないからね。後継者もないし。けどね、ちゃんと固定ファンもいるから大丈夫、そんなにすぐにはつぶれないと思うよ」

おばさんの姿は今日も見えなかったが、厨房のおじさんも豪快に笑ってる。

そんな様子を見ると、今日でクビになったことなんて、すごく遠いことのように思える。

自分には何も残らないなどと、ずいぶんいい加減なことを思ってしまった。胸のつぶれるような毎日の、その渦中では、もの凄く視野が狭くなっていたから仕方なかったのかもしれない。

でも、自分には、健康な体もあるし、お金を使う暇も心の余裕もなかったおかげで、当面の家賃の心配をする必要もない。

おいしいラーメンを作るこのおじさん、隣りにいる元先輩社員、私をねぎらってくれた人たち、自分の方から連絡を絶ってしまった友人たち。

残っているものを見まわすと、自分はよくよくぜいたくな奴だと思える。

昔の友人にもこちらから連絡をとってみよう。就職活動にもぼちぼちフロントウしよう。どちらもダメもとで。いや仕事は遅くとも失業給付が切れるまでになんとか。

でもその前に、少し休んで自分を甘やかそう。客観的に見れば、暴言に抵抗もせず離職しただけの話。でも、甘ちゃんの私にとって、なかなかきつい体験をしたのは確かだから。

おじさんが杏露酒をサービスしてくれた。あまり酒に耐性がない私は、少しだけをいただいて、お湯でわけてもらった。おじさんが呆れながらも残りを飲んだ。

それから片づけを手伝うと、おじさんに手を振って、彼と一緒に店をでた。

外の道を歩きはじめると、さえざえと冷えた冬の空気がいきなり身にしみてくる。

残念なことに、さっきまでの楽しさの余韻に浸っている暇はなかった。どこからか降って湧いたような気まずさが、あっさり空気を覆いはじめている。

無口になった彼の様子に、徐々に不安がつのった。焦って話題を

探しても、店で何を話していたのかすら思いだせない。

人通りの少ない脇道に入ると、余計に何ともいえない気まずさが濃くなって、左手を強く握り込みたくなる。でも、今それをしてはいけないと思う。

そのとき、軽く握った左の手のひらと指の隙間に、彼の指がすり込むのを感じた。親指以外の四本の指どうしが絡み合う。彼が立ちどまってしまったので、私も足をとめた。

癖が出そうになったのを気づかれたのか。ぎくしゃくと彼の方を窺うと、目があってしまった。

「爪、立ててみてよ」

「えっ？」

爪を、立てると？ この状態で、というか彼の指の上に？

「そんな趣味、私にはないです」

笑って流そうとしたが、思いがけず彼の表情が真剣で、語尾がいまいになる。

「俺にもないよ。どれくらいの痛みなのか、知りたいだけ」

そんなこと言われたら、余計に無理だ。

彼の声は静かなのに、言ってる内容が激しくそぐわない。

「できません」

「できる」

「その必要がないです」

もうこの話題は終わりだと下唇をかみしめる私を、眼鏡をしていない彼の視線は逃してくれない。今も曇った眼鏡をしていればよかったのに。

「どうして、いつも・・・」

唐突につながれている方の手がひかれ、倒れ込むように傾いだ私の体が、彼のもう片方の腕だけで強く抱きしめられた。

速い鼓動が聞こえる、気がする。自分のと、彼のと。

彼と話をしたのは、今日でまだ二度目。それなのに、そんな人の心臓の音を感じながら、いろいろどうでもいいほど、心がほどけてくる。

石橋をたたいても渡らない私はいつたいどこへ行ったのか。

でも、別にやけになってるわけでも、淋しさに流されてるわけでもないと思う。

あの背中を目にしたときか、曇った眼鏡のいらっしやいを聞いたときか、いつからかはわからないけど、私はずっと惹かれていた。それに、爪なんか立てなくなつて、この人は知っていてくれるのだ。私の痛かったことも、情けなかったことも。

彼の痛かったことや情けなかったことを知る人に、私も、なりたいたと思った。

腕の力が少しゆるめられて、私はそつと息をはいた。そういえば、この間からずっと、言いたかったお礼を言っていなかった。

「あの、ありがとう」

彼が驚いたように身じろぎするのがわかった。自分で言ったことなのに、いきなりすぎて意味がわからないのも当然だと納得してしまっ

「何が？」

「いろいろまとめて。今日のことも、この前のことも。でも、」

背中がふつと寒くなって、かわりにあたたかい手のひらが頬に触れる。

何かと聞いたのは彼の方なのに、聞いたその唇が答えの続きを遮った。

遠慮がちだったキスが、すぐにさぐるように深くなっていく。

左手をずつとつながれたまま、ことばのない時間が長くて、少し不安になった。

だからというか、やっぱり私の左手は、彼の指に爪を立ててしまった。跡が残るほど強くではない、はずだけど。

その手を残して身体が離れてから、彼は黙って空の方を指さした。振りあおいだ私の目に、まんまるから三日月の分だけ欠けた形の月が、黄色い光をこぼすのが見えた。

そして現在の私は転職活動中。無職生活中ともいう。  
履歴書をエントリまたは送付、面接にかすりさえせず落とされる、  
この黄金の繰り返しパターンは、すでに新卒のときに経験済みだ。  
面接はさらに気が重いが、あの合併後の日々を思いだせば、多少  
のことは我慢できるという副産物に恵まれてもいる。暴言上司に感  
謝すべきだろうか。しないけど。

この生活で、うつくつがまったく溜まらないといえは嘘になるが、  
私には嬉しいうつくつ回避策があった。あのラーメン屋を少しだけ  
手伝わせてもらっているのだ。

おばさんは店に復活を果たしたのだが、遅い時間になるとまだ辛  
いという。だから、夜の数時間だけ、店に通っている。

といっても片づけや洗い物専門なのだが、嫌でも人と接すること  
ができる。

初日なんかは「いらっしやい」を言うタイミングがおかしなこと  
になっていたが、最近では私目当てで客が増えた、などとおじさん  
が言ってくれている。全面的に嘘くさいけど、そういうことにして  
おこう。

もちろん、報酬がおいしいしょうゆラーメンであることも外せな  
い。

そして、こちらの店主の甥御さんとは、現在お付き合いさせてい  
ただいている。

彼はこのところ、仕事はかなり忙しいらしい。うまく私にも仕事  
が見つかって、あつぷあつぷするようになって、そういうことが  
原因で自然消滅なんてことにはならないようにしたいと思う。

もし別れるとしても、前みたいに自然消滅ではなく、ちゃんとし  
た理由が欲しい。

・・・それにしても、付き合い出したばかりで別れを考えずにいられないこの性格は、もう少しどうにかなってくれるのだろうか。

陽が落ちる頃、赤い看板の小さなラーメン屋をめざして歩く。さすがにもう迷子にはならない。

向こうに見える空の色は不思議なグラデーションをつくっていて、夕焼けと、月と、星が、同居していた。

空はいつもあったのに、この数力月はそんなことも忘れていたらしい。彼に出会わなければ、今でも思い出せないままだったのだろうか。

でも、あの背中を見つけたのは私の方が先のはず。廊下で握った拳を心配してくれたのは、絶対それより後だと思う。

あのととき遮られた「でも」の続きを後で伝えたら、わりと負けず嫌いだよねと笑われた。拒絶のことばが続くと思ったのだと彼は言う。まだまだ、彼については知らないことがいっぱいだ。

今日の月は三日月。今は、手のひらに三日月はない。

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2339ba/>

---

手のひらの三日月

2012年1月5日23時48分発行